

富城殿女房尼御前御書

弘安二年十一月二五日 五八歳

はるかにみまいらせ候はねば、をぼつかなく候。たうじ^{当時}とてまたのしき事は候はねども、むかしはことにわびしく候ひし時より、やしなわれまいらせて候へば、ことに^{恩重}をんをもくをもひまいらせ候。それについては、いのちはつるかめのごとく、さいわい^{幸福}は月のまさり、しをのみつが^{潮満}ごとくところそ、法華経にはいのりまいらせ候へ。さてはえち^越後房・しもつけ^{下野}房と申す僧を、いよどの^{伊予}につけて候ぞ。しばらくふびんにあたらせ給へと、^{富木}とき殿には申させ給へ。恐々謹言。

十一月廿五日

日 蓮 花 押

富 城 殿 女 房 尼 御 前

^{伊予}いよ房は^{がくしょう}学 生 になりて候ぞ。つねに法門きかせ給ひ候へ。